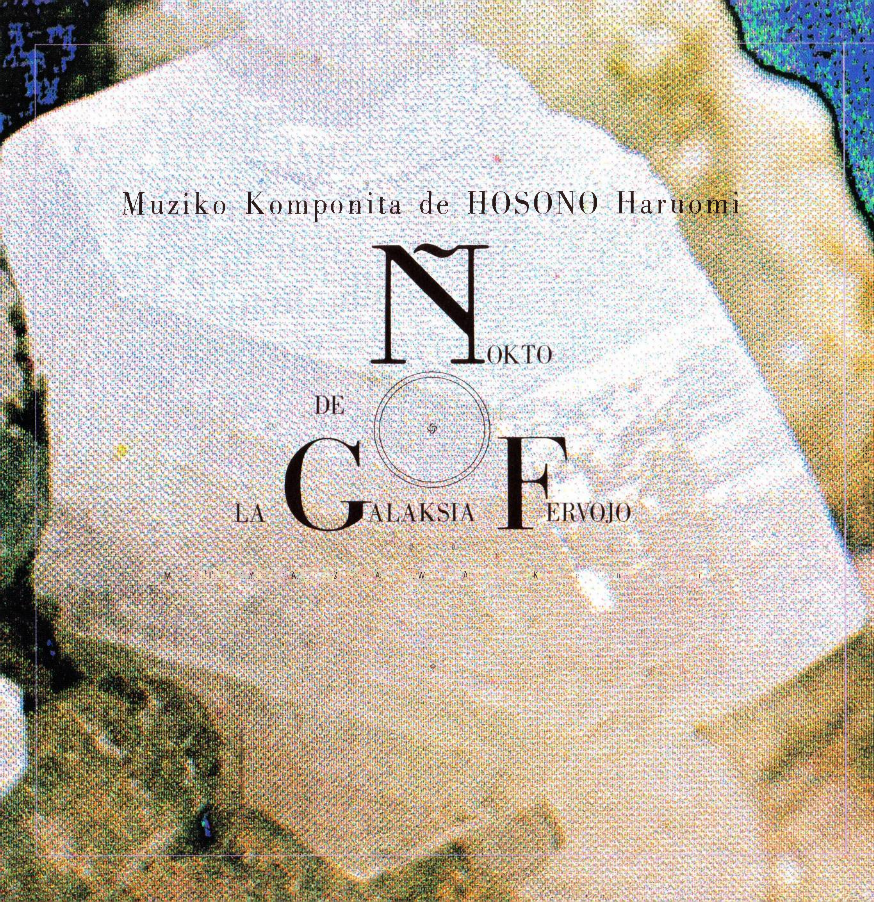
Muziko Komponita de HOSONO Haruomi

ÑOKTO DE LA GALAKSIA FERVOJO

de

M I Y A Z A W A K e n z i

"Nu do, koraj, cu vi scias, kio fakte estas tiu nebula blankajo, kiun oni nomis jen rivero jen postesigno de fluinta lakto?"


Muziko Komponita de HOSONO Haruomi
ÑOKTO
DE
LA GALAKSIA FERVOJO

DISC-1ne

01. メイン・タイトル ……… 作曲・編曲：細野晴臣
02. 幻想四次のテーマ ……… 作曲・編曲：細野晴臣
03. 幻想と現実 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
04. 晴れの日 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
05. 星めぐりの歌 ……… 作曲：宮沢賢治／編曲：細野晴臣
06. ジョバンニの幻想 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
07. ケンタウルスの星祭り ……… 作曲・編曲：細野晴臣
08. 天気輪の柱 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
09. よろこび ……… 作曲：越 美晴／編曲：細野晴臣
10. 北十字 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
11. プリオシン海岸 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
12. 幻想の歴史 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
13. 極楽のハープ ……… 作曲・編曲：細野晴臣
14. ジョバンニの透明な哀しみ ……… 作曲：越 美晴／編曲：細野晴臣
15. 一番のさいわい ……… 作曲・編曲：細野晴臣
16. 別離のテーマ ……… 作曲・編曲：細野晴臣
17. 走る ……… 作曲：越 美晴／編曲：細野晴臣
18. 45分 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
19. 鎮魂歌 ……… 作曲：越 美晴／編曲：細野晴臣
20. エンド・テーマ「銀河鉄道の夜」 ……… 作曲・編曲：細野晴臣
21. 銀河鉄道の夜（ピアノ・ヴァージョン）（『コインシデンタル・ミュージック』より） ……… 作曲・編曲：細野晴臣
22. 主よ、みもとに近づかん〈賛美歌（プロテスタント）320番〉（『ザ・ベスト・オブ・ノンスタンダード』より）
……… 編曲：細野晴臣／歌：ノンスタンダード合唱団
23. イメージ・ソング「銀河鉄道の夜」（唄：中原香織） ……… 作詞：松本隆／作曲：細野晴臣
編曲：細野晴臣　戸田誠司（ストリングス編曲：福原まり）
24. イメージ・ソング「銀河鉄道の夜」（インストゥルメンタル・ヴァージョン）（『ザ・ベスト・オブ・ノンスタンダード』より）
……… 作曲：細野晴臣／編曲：細野晴臣　戸田誠司（ストリングス編曲：福原まり）

DISC-2wo

01. TV-CM「街に、生きる力。篇」Aタイプ .... 作曲・編曲：細野晴臣

02. 家路（A） .... 作曲・編曲：細野晴臣

03. 困惑（B） .... 作曲・編曲：細野晴臣

04. 一番のさいわい（別ヴァージョン） .... 作曲・編曲：細野晴臣

05. 星めぐりの歌（ハンドベル・ヴァージョン） .... 作曲：宮沢賢治／編曲：細野晴臣

06. 青い玉（A） .... 作曲・編曲：細野晴臣

07. TV-CM「街に、生きる力。篇」Bタイプ .... 作曲・編曲：細野晴臣

08. 天気輪の柱　ピアノ・サスペンス .... 作曲・編曲：細野晴臣

09. 45分（別ヴァージョン） .... 作曲・編曲：細野晴臣

10. 燐光の原 .... 作曲・編曲：細野晴臣

11. TV-CM「街に、生きる力。篇」Cタイプ .... 作曲・編曲：細野晴臣

12. アルビレオ～星の観測所 .... 作曲・編曲：細野晴臣

13. 銀河の海原 .... 作曲・編曲：細野晴臣

14. 主よ、みもとに近づかん〈賛美歌（プロテスタント）320番〉
（ベーシック・トラック・ヴァージョン） .... 歌：ノンスタンダード合唱団

15. イメージ・ソング「銀河鉄道の夜」（デモ・ヴァージョン） .... 作曲・編曲：細野晴臣

TASIRO Atumi : Peco da Rakonto

ひとつぶの物語

プロデューサー：**田代敦巳**

この物語は、再び始まることはあっても、終ることは決してありません。それは又、この物語全体が、一つの銀河の永遠の流れであり、そこに敷きつめられた無数のきれいな砂、そのひとつぶ、ひとつぶの物語でもあるのです。そのひとつぶづつの砂の中に燃えている神秘的な小さな光を消さない様に、私達もこの物語の中を歩まなければならないでしょう。その時、私達は、いつの間にか、銀河の風の中を走るカムパネルラと地上のジョバンニの二人の心を同時に持つことが出来るのです。そしてあの不思議な細野晴臣さんのオオケストラとともに。



あの光る帯の一つ一つがみんな星なんだ

SUGII Gisaburô : Subtila Mondo Muzika

微妙な音楽世界

監督：杉井ギサブロー

この物語の主人公ジョバンニの心はいつも不安定にゆれ動いている。病気の母を想う気持と、その母から逃れてどこか遠くへ行ってしまいたいと想う気持、学校の先生や友達におもいきり近づきたいと想う気持と、みんなからはやく離れてひとりになりたいと想う気持。――このゆれる心はジョバンニの生活の孤独感が育んだ感性の高さからおこるものなのだろう。

星まつりの晩、ジョバンニは祭りの広場からひとり離れて黒い丘へとのぼり、銀河をながめながら、ついに街を捨ててしまう。――街を捨てるということは自分の生きる場を放棄してしまうことだ。――そして幻想第四次の列車の乗客となってしまう。その旅の中でもジョバンニの心は、さまざまのことに出逢うたびにゆれつづける。

はじめて細野さんとお逢いして、この映画のイメージを交換したとき、このゆれるということについて話し合った。

細野さんはじつに微妙な音楽世界でこのゆれを表現してくれた。私はこの後、音響監督といっしょに映像と音のダビングをして「銀河鉄道の夜」の映画世界をつくる仕事にとりかかるところだが、いま頭の中を細野音楽と映像とがからみ合いながら駆けぬけている……。



きっと、みんなもう、眠ってしまったんだ

MASUMURA Hirosi : MIYAZAWA Kenzi.........Jen Mondo, per Forto Neatingebla

力ではたどり着くことのできない世界……宮澤賢治

原案：**ますむら・ひろし**

伊坂芳太良にあこがれていて、イラストレーターになりたかったのです。米沢を離れ上京しました。東京の街が灰色に見えました。賢治に再会したのは、そんな頃です。マンガの落書き帳と化していた中学校の教科書で出会った賢治は、暗くてさびしい話を書く人でしかありませんでした。三畳一間のアパートでページをめくっていると、故郷では感じる必要もなかった草っぱらをめぐる風の音や、葉っぱの匂いが立ちこめてきます。猫やキツネが生き生きと動き始めます。太い腹をしたヒデヨシという猫を、僕のペンが生み出しました。
緑に埋もれた野田市へ移りました。賢治のイーハトーヴをもじったアタゴオルやヨネザアドというユートピアが浮かびあがり、その中に僕の猫たちを放してやりました。奇妙な草や木の中を、彼らは勝手に動きまわり、賢治の星まつりやガラスのマントをマンガに替えて行きました。僕はマンガ家になっていました。猫たちを描き続けました。それは賢治作品をマンガ化するための準備だったような気がします。
『銀河鉄道の夜』は、僕の宝箱にジョン・レノンの歌詞といっしょに大切にしまっていた宝物です。その宝物をマンガ化しました。最初何度も人間の顔で試してみました。ジョバンニ、カムパネルラが迷惑そうな顔をしてにらみます。『銀河鉄道の夜』を愛するたくさんの人たちのきびしいまなざしが見えてきます。主人公の顔を人間で描いて決めつけてしまうのではなく、むしろそのイメージをふくらませたいと思いました。幻想第四次の不思議な透明感を、人間で表すことはできませんでした。僕の猫たちがまた動き始めました。彼らによって、世界は気負いなく、自然に呼吸しはじめました。
賢治は僕にとって、いつも身近にいてくれる大切な人です。力ではたどり着くことのできない世界を教えてくれた大事な先生です。

BETUYAKU Minoru : MIYAZAWA Kenzi Estas Mistera Animo

宮沢賢治は不思議なたましいである。

脚本：別役 実

《おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました》という書き出しで『どんぐりと山猫』のものがたりは、はじめられる。私はこれがひどく気に入っている。そして、宮沢賢治の「不思議の国」へ入りこもうとする時には、いつもこの書き出しを思い出すことにしている。

私の家の、玄関わきの小さな郵便受けの中に、カサリと音がして、一枚の葉書が舞いこむのである。「きっと山猫からだぞ」とつぶやいて、《山猫のにゃあとした顔》など思い浮かべながら葉書を手にすると、それでもう、賢治の「不思議の国」へ入りこんでしまっているというわけなのだ。

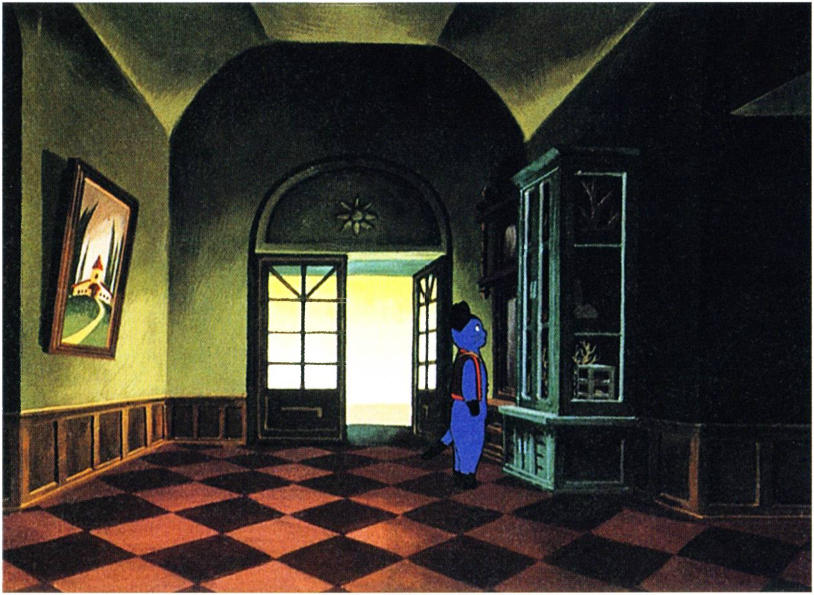
ほんのちょっとした手続きであるが、これはかなり重要なことに違いない。プールに入る前に準備運動をしておく必要があるように、体も心も柔軟にしておかないと、その世界にしなやかに入ってゆくことが出来ないのである。

宮沢賢治は、それ自体不思議なたましいである。それは、かって我々の出合ったどのようなものとも、似ていない。しかも、ただ単に変っているのではなく、変っていながらもそれはどうしてもそのようなものでなければならないのだということを、いやおうなく我々に信じこませてしまうのであり、従って不思議なのである。

我々にとって、宮沢賢治の出会うことそのものが冒険であるのは、恐らくそのせいだ。そしてまた、宮沢賢治の世界に入りこむために、私がいささかの手続きを必要とするのも、恐らくそのせいだ。その人も、その世界も、我々がいるこの場所から隔絶された彼方にいるのではなく、まるでいつもいる人のように、そして見馴れた風景のように、ここにいるのにもかかわらず、その人に出合い、その世界に入りこむためには、不思議を不思議と感じとるための、或るしなやかさを手に入れなければならないからである。



あれ、来たときと違っているね。みんな石になっている……



君のお父さんが持ってきてくれた標本だよ

COMPUTOR PROGRAMMED AND PERFORMED BY 細野晴臣 *HARUOMI HOSONO*
WITH FRIENDS OF EARTH

RECORDED BY 田中信一 *SHINICHI TANAKA AND* 寺田康彦 *YASUHIKO TERADA*
AT TEICHIKU SUGINAMI STUDIO, TOKYO
ASSISTED BY 菊池裕雪 *HIROYUKI KIKUCHI AND* 服部秀美 *HIDEMI HATTORI*
MIXED BY 田中信一 *SHINICHI TANAKA AT ONKYO HAUS STUDIO, TOKYO. 1985*

<FRIENDS OF EARTH>
MICRO COMPUTOR, DIGITAL SAMPLING SYSTEMS
SHI-SHONEN, WORLD STANDARD (CHORUS)
越美晴 *MIHARU KOSHI (PIANO, CHORUS)*
福沢もろ *MORO FUKUZAWA (VOICE, CHORUS)*

EQUIPMENTS : 戸田裕三 *YUZO TODA (SYSTEMA)*
ART WORK : ハラタ・ヘイキチ *HEIKICHI HARATA*
CHARACTER : ますむら・ひろし *HIROSHI MASUMURA*
MUSICAL COODINATION 岩崎敦子 *ATSUKO IWASAKI*

TIME KEEPER : 杉村純子 *JUNKO SUGIMURA*
MANAGEMENT OFFICE : MEDIUM CORP.,
SUPERVISED BY 牧村憲一 *KENICHI MAKIMURA*
AUTHORIZED BY 伊藤洋一 *YOOICHI ITOO FOR GEO CO.,*

PRODUCED BY 細野晴臣 *HARUOMI HOSONO*

銀河鉄道の夜　アニメーション製作スタッフ

◉製作	朝日新聞社 テレビ朝日 日本ヘラルド映画グループ
◉プロデューサー	原　正人 田代敦巳
◉原作	宮澤賢治
◉原案	ますむら・ひろし
◉脚本	別役　実
◉企画	伊藤正昭 山下健一郎
◉監督	杉井ギサブロー
◉製作プロダクション	グループ・タック ヘラルド・エース





Komputile Programita kaj Ludata de HOSONO Haruomi
kune kun Friends of Earth

Registrita de TANAKA Sin'iti kaj TERADA Yasuhiko
ĉe Teichiku Suginami Studio, Tokio
kun Asisto de KIKUTI Hiroyuki kaj HATTORI Hidemi
Mikasarangô de TANAKA Sin'iti
ĉe Onkyo Haus Studio, Tokio, 1985

Friends of Earth
Mikrokomputilo
Sistemoj por Komputika Sonkompono
Shi-Shonen (koruso)
World Standard (Koruso)
KOSI Miharu (Piano kaj Koruso)
HUKUZAWA Moro (Voĉo kaj Koruso)

Komputilteknikaj Laboroj de TODA Yûzô (Systema)
Arta Desegnado de HARATA Heikiti
Figuroj Kreitaj de MASUMURA Hirosi
Muzika Kunordigo de IWASAKI Atuko

Tagordo Arangîta de SUGIMURA Zyunko
Administrita de Medium Corp.,
Reviziita de MAKIMURA Ken'iti
Diskigo Arangîta de ITÔ Yôiti por Geo Co., Ltd.

Arangô Direktita de HOSONO Haruomi



中で小さな火が燃えている……



これだけ活字拾ってゆけるかね

『銀河鉄道の夜』の世界／鈴木惣一朗

『銀河鉄道の夜』の音楽を聴いている。

もう、30年以上聴いている。

今でもぼくは『銀河鉄道の夜』の世界にいる。

『銀河鉄道の夜』で貫かれた、細野さんの「音」への追求、情緒感、「響き」への研ぎ澄まされた感覚は印象深いもので、いわゆる映画の付随音楽〜サウンドトラックの域を越えてしまっていた。『銀河鉄道の夜』は、細野さんのオリジナル・アルバムの一枚として、しっかりカウントされるべき作品だと思う。

その音をはじめて聴いたのは、奇しくも自分のデビュー盤（ワールドスタンダード）のミックス・ダウンの最中だった。銀座のレコーディングスタジオ音響ハウスだったと思う。細野さんは出来あがったばかりの『銀河鉄道の夜』のテープを持ってやって来た。そして、小脇にはニーチェの文庫本（「この人を見よ」）があった。余談だが、ワールドスタンダードのレコーディング立会い時、細野さんはいつもなぜか素足だった。そして、持参したニーチェの本をずっと読んでいた。

「出来上がったばかりなの、聴く？」と言って細野さんは、大音量のラージ・スピーカーで聴かせてくれた。「たくさん作ったから、アルバムは2枚組になっちゃうと思うよ」と言っていた。細野さんは、確かにぼくにそう言った。すごくうれしそうだった。

実際に発売された『銀河鉄道の夜』は、通常の1枚盤だったが、その日から今日まで、いつの日か、2枚組の『銀河鉄道の夜』を聴ける日が来るだろうと思っていた。それが今、あなたが手にしている『銀河鉄道の夜・特別版』だ。（補足・膨大な未発表＆別ヴァージョンは見つかったが、この特別版には、その中から細野さん自身の許諾が降りたものだけに厳選されていることをご理解して頂きたい。つまり細野さん自身にとっても『銀河鉄道の夜』は特別なアルバムなのだということ）

「なにが しあわせか わからないのです。ほんとうにどんなつらいことでも それがただしいみちを進む中でのできごとなら 峠の上りも下りも みんな ほんとうの幸福に近づく一あしずつですから」

（『銀河鉄道の夜』燈台守のセリフより）

宮沢賢治（みやざわ けんじ、1896年8月27日〜1933年9月21日）は言うまでもなく、日本を代表する作家であり詩人だ。音楽家としての一面も持ち、サントラでも使われている「星めぐりの歌」など美しい曲も複数残している。

岩手県花巻で農学校の教師をしていた賢治は、岩手の豊かな自然と仏教信仰に根ざした創作を行ない、作品中に登場する架空の理想郷を「イーハトーブ」と名付けた（ちなみに岩手県出身の大瀧詠一さんの変名のひとつは「イーハトーブ田五三九」）。

その37年の短い生涯で、生前に出版された作品は、詩集『春と修羅』と童話短編集『注文の多い料理店』

の2冊のみ。没後、弟の宮沢清六さんなどが中心となり作品が発売されると評価や人気が高まり、国民的作家となっていった。中でも『銀河鉄道の夜』は人気が高く、賢治の代表作と言われている。

しかし、この作品は、童話という枠からはみ出た斬新な構成と深淵な内容で、最も謎に満ちている難解な作品とも言われている。

賢治作品は、ほとんどが草稿状態で遺され、死後に刊行されたものばかりだが、中でも『銀河鉄道の夜』は、長年に渡り複雑に推敲を重ねた小説であり、ぼくたちが読んでいるのは「未完の傑作」ということになる。
『銀河鉄道の夜』の映画を手掛けた杉井ギサブロー監督は〜手塚治虫さんとのアニメーションで有名な方だが〜音楽制作の打ち合わせの際、細野さんが「どういう傾向の音楽を作ればいいですか？」とたずねると「細野さん、揺れてください」と答えたという。

そして、のちに杉井監督はこんな言葉を残している。

「生命の根源というものは、物理的に揺れるということなんです。白と黒、生と死の間を揺れること。それを伝えただけで、あの曲があがってきたので、本当に素晴らしいと思いました」

「揺れる」。まさに、それが、『銀河鉄道の夜』の物語と細野さんの音楽のキーワードだと思う。主人公の少年ジョバンニの心はずっと不安定に繊細に揺れ動いている。
「今日のうちに　遠くに行ってしまう　わたしの妹よ」という言葉で始まる賢治の妹トシさんが亡くなった日を描いた「永訣の朝」という有名な詩がある。この物語を書いた頃の賢治は「作家・宮沢賢治」の最大の理解者でもあった妹を肺炎で亡くし（享年24歳）、慟哭し、その魂の行方を探りたいと本気で思っていたという。

『銀河鉄道の夜』の主人公・ジョバンニは銀河鉄道に乗って夜空を旅し、そこで親友のカムパネルラに会う。ジョバンニは賢治で、カムパネルラはトシだと考えると合点がいく。賢治は妹と、いつまでも一緒にいたかった。人生を旅したかった。物語を終わらせたくなかった。

「ぼくたち、どこまでもどこまでも一緒に行こうねえ」

でも、現実に戻ったジョバンニは、カムパネルラの死を告げられる。『銀河鉄道の夜』は生と死の鎮魂の物語であり、この世とあの世を行き来する、揺れる物語である。

そして、細野さんの音楽も、いつもどこか揺れている。それは『銀河鉄道の夜』の音楽に限ったことではない。

細野さんの音楽は、いつでもどれでも「明るさ」「悲し

み」どちらかの情感に甘く委ねることなく、ふわりと揺れている。
それでいて、どこかユーモラス。どこか哀しい。
細野さん自身も『分福茶釜』(平凡社)というぼくとの対談本シリーズの時に「ぼくはいつもブレている」と言っていたことがある。

「ブレない。ということはいいことじゃない。お釈迦さまの言った一番大事な教えは、あっちにもいかずこっちにもいかず真ん中を歩くということじゃなくて、あっちとこっち、その両方を行かないと真ん中にならないよ、ということ。中庸っていうと、真ん中を静かに歩くみたいな、そういう動きのないものになっているけど、いくら安定を求めたって人は誰だって揺れてるんだよ」

そうか。賢治の小説と細野さんの音楽。その空気感はどこか似ているなと、ずっと思ってきたが、それはその「揺れ」だったのかもしれない。
そして、事実は小説よりも奇なり。
『銀河鉄道の夜』には「タイタニック号」が登場する。
細野さんが、この映画音楽の依頼をされたのが、運命的な必然に思えてくる。

銀河鉄道の汽車には、さまざまな死者が乗り込んでくる。

「自分たちが乗った船が、氷山にぶつかって沈没して命を失い、天上に向かうため、銀河鉄道に乗り込んだ」と青年(死者)たちが語る場面。
1912年4月14日の深夜。北大西洋のニューファンドランド沖を航行していた豪華客船タイタニック号は氷山に衝突、翌日未明に沈没。犠牲者の数はおよそ1500人。その船に、ただ1人乗船していた日本人。それが、細野さんの祖父・細野正文さんだった。もし、この時、正文さんが亡くなっていたら、細野さんはこの世に誕生していないことになる。

「主よ、みもとに　近づかん、のぼるみちは」

「十字架に　ありともなど」

「悲しむべき　主よ　みもとに　近づかん」

「うつし世をば　はなれて、天かける日」

「きたらば　いよいよちかく」

「みもとにゆき　主のみかおを　あおぎみん」

「主よ、みもとに近づかん」〈賛美歌(プロテスタント)320番〉～沈みゆく船で、実際に歌われた賛美歌の一節だ。賢治は、更に「みんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたひました」と描き、死にゆく覚悟をした人たちが、各国語(エスペラント語)で歌いながら、国籍や階級を超えて、心をひとつにしていったとした。
この発想の下敷きになったのが、実際の事件「タイ

タニック号の沈没」だったのは言うまでもない（船上楽団が演奏していた賛美歌には諸説あり〜「主よ、みもとに近づかん」「オータム」「イエスの血は決して私を見捨てたことがない」等）。

正文氏は、帰国後「タイタニック号の生き残り」として、論難されるだけでなく「他人を押しのけて助かった」等の事実無根の誹謗を受ける。しかし、正文氏はそうした声に（公的に）反論することをあえて避け、1939年に静かにこの世を去る。

『銀河鉄道の夜』で、ジョバンニがカムパネルラと共に天国に旅立たなかったように、正文氏も又、タイタニック号では死ではなく「生きる道」を選んだ。それは、そのとき、とても「勇気」のいる行為だったのだと思う。「命も今日で終わることを覚悟して、慌てず、日本人の恥になるまじきと心掛けつつ、機会を待っていた」死後発見された手記には、そう書かれている。沈み行く船で揺れ、生と死の間で揺れ「あの世の縁」から「この世」に帰ってきた祖父。その「揺れ」の中から生まれたのが、細野晴臣という音楽家なのだと思う。

ちなみに、映画にも使われた「主よ、みもとに近づかん」の録音には、ぼくもコーラスで参加している（フル・ヴァージョンは、『ザ・ベスト・オブ・ノンスタンダード』というベスト盤に収録されている）。これも録音の記録として書き残しておこうと思う。
時期は、1985年のおそらく5月で、場所は銀座の音響ハウス。エンジニアは田中信一さん。オケは完成していて、タイタニック号が遭難情報を送信し、近くにいた潜水艦が受信したという無線ノイズの再現コラージュも出来ていた。メンバーは、『ノンスタンダード』レーベルのシ・ショーネンとワールドスタンダードと越美晴（以下、コシミハル）さん。そして、福沢もろさん。細野さんはブースに来ないで、コントロール・ルームに静かにいた記憶がある。
歌う言語がエスペラント語という全員が初めて接するものだったため、日本エスペラント学会の方（河元寛視さん）が来て指導してくれた。スタジオでは全員で丸くなってマイクを囲み歌うセッティングだった。
録音ブースの灯りは暗く落とされ、マイクのもとだけ灯りが照らされ、それは細野さんの演出だったように感じる。事前に賛美歌の譜面は渡されていたが、リハもなく、いきなりの録音だった。細野さんが作ったタイタニック号の無線ノイズがヘッドフォンから聴こえ、みんなでびっくりしたのを思い出す。ぼくはまだデビュー前でレコーディングそのものに慣れていなかったため、その時点で、少し先輩の音楽家であった戸田くんとミハルちゃんがコーラスの入れ方などを指導してくれた。主旋律を先に何度か歌い、ハモリ・パートをその上にダビングしていく。
細野さんはこのコーラスを気に入ってくれて、同年、6月に国立競技場で行われたイベント「オール・トゥゲザー・ナウ」のステージで行われたはっぴいえんど再結成による「さよならアメリカ、さよならニッポン」のバックコーラスも務めることになる。

余談だが、「主よ、みもとに近づかん」「さよならアメリカ、さよならニッポン」をほぼ同時期に歌った経験で、ぼくは混声合唱やクワイヤの素晴らしさに目覚めた。この時の経験が自分の作風にも強い影響を与え、プロデュースなどで音楽制作するときは、賛美歌やゴスペルのようなクワイヤに今でもよくアプローチしている。また、エスペラント語に初めて触れ、ワールドスタンダードのクレジットにエスペラント語表記を採用することにした。また、エスペラント学会の河元さんとはその後のワールドスタンダード『ダブル・ハピネス』制作時、「パシオ」「ラ・パガイ」で作詞を手伝ってもらい、エスペラント語で歌っている。

そんなこともあり『銀河鉄道の夜』は、ぼくにとってもかなり特別なアルバムなのである。さて、閑話休題。本題に戻ろう。

「ほんとうのさいわいとは、一体何だろう？」とジョバンニがカムパネルラに問いかける。「ほんとう」とは、究極の正解のことである。でも、カムパネルラは「わからない」と答える。
賢治は「永久の未完成。これ完成である」とも書き残している。
つまり、「ほんとうの答え」などない。「問い続けること」が大切なのだと賢治は言っているのだと思う。だから、賢治のこの作品にも終わりや答えはなく、未完のままずっと揺れ続けているのだろう。
その賢治の「ほんとうのさいわいとは？」という答えのない問いかけに、言わば『善悪の彼岸』（※）を超える音で挑んだ細野さん。

「だから、スタジオで細野さんはニーチェばかり読んでいたのかな？」『銀河鉄道の夜』の音楽を聴きながら、30年経った今、そんなことをつらつらと想う。

※ 『善悪の彼岸』1886年 ドイツ人哲学者 フリードリヒ・ニーチェ著書。 副題『将来の哲学への序曲　Vorspiel einer Philosophie der Zukunft』

雑誌広告



『銀河鉄道の夜・特別版』楽曲解説

DISC-1ne

01. メイン・タイトル

1984年12月22日、クリスマス・ムード高まる季節‥‥細野さんは、YMO時代のホーム・スタジオ、芝浦アルファ・Aスタジオに入り、21曲目に収録された「銀河鉄道の夜－ピアノ・ヴァージョン」を即興的に作ります。けれども、それはラフ・スケッチではなく「ソング」としてきちんと組み立てられていました。その「ソング」ヴァージョンは、CM音楽などにも併用されつつも、細かく解体され『銀河鉄道の夜』という映画全体に、星座のように散らばっていきます。僅か40秒の「メイン・タイトル」も又、星のかけらです。最初に聴いたときの印象は、横溝正史などのミステリー・ドラマのテーマのようでしたが、冒頭から17秒ほどの暗いピアノのグリッサンド音からの導き、その多幸感！その一瞬で、ぼくは確信しました。『銀河鉄道の夜』は、細野さんにとって特別なものなんだ、と。

02. 幻想四次のテーマ

映画『銀河鉄道の夜』を手掛けた監督・杉井ギサブローさんの、細野さんへの命題は、たった一言「揺れてください」だったそうです。そして細野さんが作った『銀河鉄道の夜』における「震える」音響。「揺れる」と「震える」。両者の、簡潔なリレーションが素晴らしいです。アルバム『フィルハーモニー』（1982年）にも、ガムラン風な「ホタル」という曲がありますが、こうした〈幽玄な音〉に対する細野さんの感覚は、ある意味、ヨーロッパ的だと感じます。因みに細野さん自身は、すべてのトラックの中で「幻想四次のテーマ」を一番気に入っているそうです。

03. 幻想と現実

いわゆる、童歌（わらべうた）の世界がそうであるように、恐怖とイノセントは背中合わせだと思います。大人になって、子供時代が特別だったと思えるのは、そうした感覚を忘れてしまっているからです。けれども細野さんは、そうしたことを〈大人になっても持ち続けることが出来るんだよ〉と実証してくれた音楽家です。そして「幻想と現実」の音楽も又、同様。幻想と現実、恐怖とイノセント。この音楽をじっと聴いていると、そのどちらも、美しい世界なのだと気づきます。細野さんの音楽は、黙って聴いているだけで、本当に色々なことを教えてくれるのです。

04. 晴れの日

奥深い『銀河鉄道の夜』の音世界。その中でも「晴れの日」のように多幸感のあるトラックには、ボヘミアのクラシック音楽家～ドヴォルザーク（「ユーモレスク」）の影響が垣間見えます。そうしたアプローチに、あえてスティール・ドラムっぽいシンセ音で取り組むあたりが、トロピカル・ハリー細野の真骨頂だと思います。コーダ部分、リズムがリットしながらピッチ・ダウンするアプローチは、少しビートルズ的です。

05. 星めぐりの歌

宮沢賢治作曲「星めぐりの歌」オルゴール・バージョンです。賢治は、自身でもチェロを弾くほどのクラシック音楽好きでした。膨大な枚数のクラシック・レコードを収集し、レコード・コンサートも自主的に催していたそうです。因みに、細野さん周辺の音楽家では、やはり松本隆さんの詩の世界に賢治（心象スケッチ）を感じます。更に、高橋幸宏さんは中原中也、あがた森魚さんは稲垣足穂、鈴木慶一さんは三木鶏郎。優れた作家には、優れた先人の作家たちが透かして見えるものです。

06. ジョバンニの幻想

アルバム『銀河鉄道の夜』は聴き進むにつれ、全貌が段々と見えてくるように構成されています。通常のサウンド・トラック盤では、曲間は比較的おざなりになりがちですが、オリジナル・テープを見ると細野さんは、何度も曲間を作り直していました。こうした点から見ても、『銀河鉄道の夜』の音楽が、映画の付随音楽として（だけ）ではなく、コンセプト・アルバムとして丁寧に作られたことがわかります。「ジョバンニの幻想」は「メイン・タイトル」と「幻想四次のテーマ」が合体して、独自の星座（音楽）を形作っています。何とも恐ろしい曲想ですが、日本的な湿度はなく、イタリアのホラー映画監督ダリル・アルジェントのような乾いた恐怖感です。細野さんの独特な（怖さの）さじ加減も聴き取って頂ければ、と思います。

07. ケンタウルスの星祭り

ラーガ、インド・ポップ的な星祭り音楽です。サウンド・デザインに、YMO「ロータス・ラヴ」の片鱗が垣間見えるところもポイントだと思います。

08. 天気輪の柱

『銀河鉄道の夜』の音世界に、細野さんが、ぐっと入り込んでることがわかるトラックです。もはや、自動筆記（作曲）のような作品で、細野さんにしては珍しく、不協和音へのアプローチが積極的です。

09. よろこび

細野さんと共に『銀河鉄道の夜』の音楽をアシストした（コシ）ミハルちゃんは、この時期、シューベルトの「野ばら」でゲーテの歌詞に触れ、心が解放されたと話していました。「よろこび」は自身のアルバム『ボーイ・ソプラノ』に収録されていてもよいほどの素晴らしさ。出色の、出来栄えだと思います。

10. 北十字

『銀河鉄道の夜』は大きく言えば、架空の列車・銀河鉄道で天の川の旅をする物語です。旅は「北十字」～「はくちょう座」から始まり「わし座」→「南十字」→「石炭袋」へと続きます。「北十字」というネーミングは、北極星をイメージしているのでしょう。北極星は、星座の意味としては〈この世で生きているもの、すべての導きの星〉。賢治は、死んだあとの異次元の世界を、天空の星を使って表現しましたが、細野さんはこの音楽を作りながら、その狭間の世界を泳いだ

（心象スケッチした）のだと思います。

11. プリオシン海岸

ぼくは以前、宮沢賢治トリビュート・アルバム（1993年『宮沢賢治メンタル・サウンド・スケッチ』プロデュース：鈴木惣一朗）の制作時、リサーチを兼ねて、真冬の花巻市を訪れたことがあります。プリオシン海岸＝北上川（賢治が言うところのイギリス海岸）では、その冷水に自分の手のひらを沈めました。その行為は、細野さんの「プリオシン海岸」の響きを知るためだったのですが、その場所はいわゆるパワー・スポットのような感じで、何とも知れない気持ちになったのを覚えています。後年の『オムニ・サイトシーング』（1989年）でも、細野さんは「プリオシン海岸」を「プリオシーヌ」と変えてリ・レコーディングしていますが、細野さん自身、独特なハーモニー（ヴォイシング）を凄く気に入っていたはずです。

12. 幻想の歴史

細野さんが『銀河鉄道の夜』で見つけた音楽的アプローチ～アラヴ＆バッハ・テイストは、その後の『オムニ・サイトシーング』（1989年）へと連なり、「ロココ」（優美と退廃という、アンニュイな部分が交じり合った独特の美意識）という世界へ辿り着きます。つまり『銀河鉄道の夜』を「ロココ」で因数分解すれば『オムニ・サイトシーング』が聴こえてくる、というわけです。

13. 極楽のハープ

「極楽のハープ」を聴いていると、細野さんの中での〈極楽、あの世のイメージ〉は、長調（たのしみ）でも単調（かなしみ）でもない、無調の世界なのかな、と感じます。

14. ジョバンニの透明な哀しみ

まさに、ミハルちゃんの音世界です。限りなくドビュッシー的な、透明な哀しみ。とてもピュアな・・・宇宙に、たった、ひとりぼっち。素晴らしいです。

15. 一番のさいわい

『銀河鉄道の夜』のテーマ変奏曲、リズミックなヴァージョンになっています。ここでは「ケンタウルスの星祭り」で使われたシンセ音の鈴（細野さんが気に入っていたのは明白）が再登場していますが、細野さんの映画音楽が、ドラマなどで使われる付随音楽～劇伴に聴こえないのは、シンセ音の鈴など、細やかなサウンド・デザインが丁寧に施されているためだと思います。

16. 別離のテーマ

「ピエトロ・ジェルミ」（モナド・シリーズ『コインシデンタル・ミュージック』に収録）と、異母兄弟的な作品だと思います。ここでも震えるシンセ音が聴こえますが、歩くようなリズムには、インティメイトなウエストコースト・ジャズの趣もあります。もしくは、軽音楽のスリー・サンズのような、ランチタイム・ミュージックのような。その時々で、興味のある音楽を「スルリ

と」擦り込ませることも細野さんの音楽の特徴です。

17. 走る

サンタフェ的な明るさがあるトラックです。この明るさ、最近ではあまり耳にすることが出来ませんが、1980年代のマーク・ゴールデンバーグという、素晴らしい音楽家のことも思い出すトラックです。

18. 45分

フランス六人組の重要人物であるテュール・オネゲルの「パシフィック231」(『交響的断章(運動)第1番』)が頭を過ぎります。更には、ゲルニカ(『YEN』レーベル)に在籍していた音楽家・上野耕路くんの影響が、細野さんの音楽からしっかりと聴こえるのです。

19. 鎮魂歌

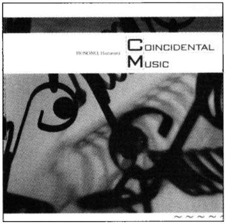
素晴らしいなぁ・・・遠くで響くバネのようなシンセ音、バレエ曲「ボレロ」(1928年、モーリス・ラヴェル作曲)のようなリズム&フレーズ〜その積み重ね、転調、膨らませ方、どれを聴いても本当に豊かで、溜息が出ます。

20. エンド・テーマ「銀河鉄道の夜」

遠い記憶ですが、ぼくは1985年の夏、池袋文芸坐地下にあった狭い映画館で『銀河鉄道の夜』の予告を観ました。「エンド・テーマ」は大音量で鳴り響き、そこにいた観客は、確かにどよめいていました。汽車が走るリズムは、やはりテュール・オネゲル的。草原を走り抜けるように勇ましく、けれど、哀しい。生命感に溢れつつも、どこか、死を予感させる。ユーモラスで絶望的、民族的でブルージー。つまり「『銀河鉄道の夜』の音楽が決定的だ!」と思うのは、人間が持つ、全ての五感に訴えるものだからなのです。

21. 銀河鉄道の夜(ピアノ・ヴァージョン)

(『コインシデンタル・ミュージック』より)



『コインシデンタル・ミュージック』

「メイン・タイトル」でご説明した、1984年12月22日、芝浦アルファ・Aスタジオでの録音です。このピアノ・ヴァージョンは軽やかな印象ですが、まるで宮沢賢治の「心象スケッチ※」のようです。

※「心象スケッチ」とは、ひとりの人間の、こころのうちを描くという意味ではなく、心象とは〈宇宙や無限の時間につながるもの〉の意。人間の心象を描くということは〈個人的なものを超えて、普遍的なものをスケッチすること〉と賢治は考えていました。

22. 主よ、みもとに近づかん 〈賛美歌(プロテスタント)320番〉

(『ザ・ベスト・オブ・ノンスタンダード』より)

ブライアン・イーノが主催した『オブスキュア』レーベルのサウンド。かなり明確に、その中心人物だった



『ザ・ベスト・オブ・ノンスタンダード』

ギャビン・ブライアーズへの〈アンサー・ソング＆オマージュ〉だったと思います。因みに、ぼくもノンスタンダード合唱団の後列で歌っています。

23. イメージ・ソング「銀河鉄道の夜」

別インタビュー中にある、プロデューサー・牧村憲一さんの発言が重要だと思います。重複しますが、一部記載しておきます。「・・・『銀河鉄道の夜』のテーマには「風の中のナウシカ」と双璧のメロディがあると思います。それは非常にブライアン・イーノの『オブスキュア』レーベルのようなアンビエントのメロディであり、構造であるにも関わらず、松本隆くんが詞を入れるとポップスの構造になるのです」

24. イメージ・ソング「銀河鉄道の夜」
（インストゥルメンタル・ヴァージョン）

中原香織さんのイメージ・ソングのインストゥルメンタル・ヴァージョンになりますが、単純なカラオケではなく、矢口博康（リアル・フィッシュ）くんのサックスもフィーチャーされ、リズムも強調されたフィラデルフィア・サウンド風味のディスコティックなリ・アレンジ・ヴァージョンになっています。

DISC-2wo

01. TV-CM「街に、生きる力。篇」Aタイプ

今回の特別版・リサーチの際、最後に見つかった音源です。建設会社のCM音楽（出演・篠原勝之）として『銀河鉄道の夜』のモチーフは使われていました。Aタイプは、メロディがハンマー・ハープのような音源で奏でられていて、篠原勝之さんのキャラクターに合わせて、よりプリミティヴな仕上がりになっています。

02. 家路（A）

『銀河鉄道の夜 Disc-1』収録「晴れの日」別ヴァージョン。テンポ・アップして、Disc-1の「晴れの日」以上に明るい曲想。「もっと！もっと！晴れの日」という印象です。

03. 困惑（B）

Disc-1の「幻想と現実」が、可愛らしいシンセ音で牧歌的に変奏されています。こうした音響を聴くと、すぐにドイツのテクノ・グループ／クラフトワークのことを思い出します。クラフトワークの音楽もまた、メロディやコードだけを独立して聴くと、非常にトラディショナルな音楽なのです。

04. 一番のさいわい（別ヴァージョン）

『銀河鉄道の夜 Disc-1』収録「一番のさいわい」のピッチベンド・ヴァージョンです。
コンピューター上でロウ・ピッチベンドされ、再生さ

れたテイクで、これもDisc-1の「一番のさいわい」より、牧歌的な曲想に変わっています。

05.　星めぐりの歌（ハンドベル・ヴァージョン）
宮沢賢治作曲「星めぐりの歌」を、ハンドベル音で演奏しています。ハンドベルで別ヴァージョンというと、通常は既成のサンプリング音源を使いますが、細野さんはシンセサイザーで、サンプリング音のような音を丁寧にシミュレートしています。この辺の拘りが、実に細野さんらしいとぼくは感じるのです。

06.　青い玉（A）
シンセサイザー（プロフェット5）による不気味なドローン音ですが、こうした音響のベースになっているのは、当時、細野さんが大きな影響を受けたブライアン・イーノ（『アンビエント4　オン・ランド』等）だと思います。

07.　TV-CM「街に、生きる力。篇」Bタイプ
建設会社のためのCM音楽、Bタイプです。よりシンプルな編成になっているため、不思議なパン・フルート音が聴きとれます。中世ヨーロッパ的な〈サークル・ダンス〉の印象もあります。

08. 天気輪の柱　ピアノ・サスペンス
『エンドレス・トーキング』の「威勢のいい滝」がベースとなっていますが、より怖いムードになっています。緊張感のあるピアノの不協和音がリズミックに響き、ぼくは不思議と何度も聴きたくなってしまいます。

09. 45分（別ヴァージョン）
Disc-1の「45分」別ヴァージョンになりますが、細野さんは、よりチープな音にしています。その装いは、やはりゲルニカの音世界。細野さんは、幾多あった国内のテクノ・グループの中でも、ゲルニカのことは特別に思っていたはずです。

10. 燐光の原
『エンドレス・トーキング』収録「羽の生えた動物」の別ヴァージョンです。『エンドレス・トーキング』では、深めのアンビエント・エコーがかけられていましたが、このヴァージョンはより慈愛のある感じ、厳粛な、賛美歌のように響きます。同じ曲でも、音響（エフェクト）によって、印象はガラリと変わるわけです。

11. TV-CM「街に、生きる力。篇」Cタイプ
建設会社のためのCM音楽、Cタイプはユーモラスなヴァージョンです。このトラックが、アルバム『フィルハーモニー』にさりげなく収録されていてもおかしくないと思います。

12. アルビレオ〜星の観測所
音響だけの作品です。ドラマ『ツイン・ピークス』『ツイン・ピークス　THE RETURN』でも、そのSE部分は、監督デヴィッド・リンチ自身が手掛けていましたが、その印象にも近いです。

13. 銀河の海原
気持ちの良いトラックです。細野さんなら〈リヴァー

ス・アンビエント〉という新ジャンルで「銀河の海原」でアルバム一枚作れるのでは？と思いました。蛇足ですが、このトラックをリヴァースしたら・・・何かの音楽が聴こえてくるのではないでしょうか・・・

14. 主よ、みもとに近づかん
〈賛美歌（プロテスタント）320番〉
（ベーシック・トラック・ヴァージョン）

『ザ・ベスト・オブ・ノンスタンダード』に収録された「主よ、みもとに近づかん〈賛美歌（プロテスタント）320番〉のベーシック・トラック・ラジオ・ノイズ・コラージュなしのヴァージョンです。
当時、レコーディングに参加していたため、よく覚えているのですが、細野さんは「賛美歌320番」をいくつかのヴァージョンで録音していました。このトラックの構成は、1番はミハルちゃんの独唱、2番は複数の女性シンガー、3番は男女混成合唱という流れでした。

15. イメージ・ソング「銀河鉄道の夜」
（デモ・ヴァージョン）

最後に、細野さんが自宅で録音した貴重なデモ・トラックです。デモを聴くと、やはりクラフトワーク（『コンピューター・ワールド』収録「電卓」）の音楽がベースになっているとわかります。

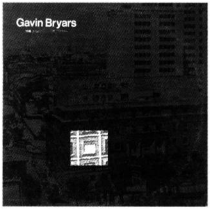
コメンタリー：鈴木惣一朗





(証言)

現代音楽家・ギャヴィン・ブライアーズの作品に『タイタニック号の沈没〜THE SINKING OF THE TITANIC』(1975年「オブスキュア」シリーズ第一弾)というアルバムがある。タイトルからもわかるように、「タイタニック号の沈没」がテーマとなっているが、そのアルバムを愛聴していた細野晴臣と鈴木惣一朗は、1990年、神戸でのコンサートのために来日していたブライアーズのもとへ、雑誌(『H2』創刊0号・筑摩書房)の取材にかこつけて会いにいった。以下は、当時の貴重なインタビューの一部抜粋です。



ギャヴィン・ブライアーズ
インタビュー:1990年12月15日

ギャヴィン・ブライアーズ/作曲家

ブライアーズの初期作品は、ジョン・ケージ、モートン・フェルドマンなどのニューヨーク周辺の音楽家の影響を強く受けているが、1969年、ポーツマスの美術学生のために書いた作品『タイタニック号の沈没』により、その名は世に知れ渡ることとなる。ブライアーズは、諸説ある証言の中から、〈船とともに氷の海へ沈んで行った楽団員たちが、間際まで演奏した曲〉として賛美歌「オータム」を選択、『タイタニック号の沈没』は彼にとってライフ・ワークとなり、新たな証言や資料をもとに何度も再演されている。その他『イエスの血は決して私を見捨てたことはない』(1971年)がよく知られているが、この作品は、浮浪者が賛美歌を抑揚をつけながら、即興で歌っている素材をループさせ、オーケストレーションが徐々に増加し、ゆっくりとフェード・アウトしていくもの。この作品も同じく再録音され、ロック・スター/トム・ウェイツが、最後のセクションにヴォーカルとして参加している。

細野　そもそも何故、タイタニック号の音楽に興味を持ったのですか。

ブライアーズ　・・・タイタニック号が沈む寸前まで、楽団が「オータム」を演奏していたという事実を知りました。最後に目撃したのが無線のオペレーターで、船から80メートルぐらい離れた水の中から、実際にそのバンドを見たらしいんですが、船が水に入る直前まで演奏していたそうです。わたしは、それはちょっと考えられない、すごいことだと思いました。音楽家たちは、楽器を放り出して逃げることもできたのに。

細野　そういった事実をいつ知ったのですか。

ブライアーズ　私はこの話を1968年に初めて聞きましたが、そうした凄い一瞬に自分がいたらどんな曲を作っただろうか、ということに興味を持ったのです。船が氷山にぶつかった時には、何人かの人たちは〈台所でお皿を割った時のように聞こえた〉とか、〈ペンシルバニアの森で昆虫が ザワザワいってる風に聞こえた〉、あるいは〈犬が猫の背を噛んだよ

うな音〉とも表現しました（中略）ですから、ひとつの音なのに、生存者の方は、それぞれ全く違った感想を抱いていたというわけです。

細野　こんな話が日本にはあります。あの『タイタニック号の沈没』の素材になっている賛美歌なんですが‥‥宮沢賢治という作家が、古い童話の中にタイタニック号が沈む時に演奏されていたのは「主よ、みもとに近づかん」だったという記述があるのですが。

ブライアーズ　そうですか。多くの人は長い間「主よ、みもとに近づかん」が、タイタニック号の中で演奏されていた賛美歌と思っていたわけですが、先ほどの最後の目撃者であるオペレーターは「オータム」だったと証言しています。多分、それを記事にした人が聞き間違えたのでしょう。



細野晴臣・責任編集『季刊音楽誌 エイチ・ツー』創刊0号

牧村憲一
インタビュー：2017年8月9日

牧村憲一／日本の音楽プロデューサー

1971年、早稲田同窓の後藤由多加に誘われ、ユイ音楽工房の設立に参加。ユイ音楽出版同事務所では、かぐや姫を担当し「神田川」（1973年）が、ディレクターとして最初に成功した楽曲となる。その後、大森昭男の「ONアソシエイツ」に移籍。CM音楽制作にあたり、元はっぴいえんどの大瀧詠一を推薦。大瀧が連れてきたシュガー・ベイブに注目し、シュガー・ベイブとセンチメンタル・シティ・ロマンスのマネージメント会社「アワ・ハウス」を興す。シュガー・ベイブ解散後は、山下達郎、大貫妙子をソロ・デビューさせ、杉真理のコーラスを担当していた竹内まりやのプロデュースも手掛けた。1980年代に入り、細野晴臣が主宰する『ノンスタンダード』レーベルで活動、その後は、ポリスター・レコードに移籍し、1990年代にはフリッパーズ・ギターやL⇔Rを世に送り出した。

牧村憲一（以下・牧村）　そもそもは『ノンスタンダード』レーベルのオフィス「GEO（ジェオ）」を作る前の段階から『銀河鉄道の夜』の話はあったと思う。坂本（龍一）さんが「戦場のメリークリスマス」（1983年）に出演して、配給元の日本ヘラルドとヨロシタ・ミュージック（YMOマネージメント・オフィス）の間にパイプが出来て、ひとつの流れができた。当時のヨロシタには、その後の『ノンスタンダード』でプロデューサーを務める伊藤洋一氏も在籍していて『ノンスタンダード』スタッフが形成されていくような時期。それで、GEOが『銀河鉄道の夜』の音楽を、委託制作に近い形で引っ張ってきて、細野さんと

監督の杉井（ギサブロー）さんは、すぐに打ち合わせに入っていった。

鈴木惣一朗（以下・鈴木）　坂本さんが『銀河鉄道の夜』の音楽をやる可能性もあったということですか？

牧村　それは絶対ないですね。杉井さんの中には〈『銀河鉄道の夜』の音楽は細野さんだ〉というイメージがしっかりあったはず。それで、時系列を確認するとテイチク傘下での『ノンスタンダード』レーベルの発足日は、1984年の8月21日だったけれど、それ以前、すでに『銀河鉄道の夜』の準備委員会はあったはず。

鈴木　翌年（1985年）の夏、ぼくも池袋の映画館に観に行きましたが、お客さんも一杯で、見終わった後、独特な高揚感が会場を包んでいたのを覚えています。

牧村　『銀河鉄道の夜』は、完成時点から〈クオリティが高い作品〉という世評があった。それは細野さんの音楽、そして、ますむらひろしさんの漫画が事前にあったこと。杉井さんという信頼できる監督であったこと。当時『戦場のメリークリスマス』で成功した日本ヘラルドが配給だったこと。その時のプロデューサーが、手塚治虫さん系列のグループ・タックの田代さんだったこと。

鈴木　グループ・タック、ぼくは知らなかったので調べてみたのですが、興味深いですね。『銀河鉄道の夜』が当時、最高のスタッフ・フォーメーションで作られたのだとわかりました。概要だけ、下記ライナーに記しておきます。

〈グループ・タック：1968年3月、旧虫プロダクションの音響スタッフであった田代敦巳が、アニメーション監督・演出家の杉井ギサブローらを誘って設立。設立当初は、東京ムービー等の他社が制作した作品の音響制作が中心だったが、1975年制作の『まんが日本昔ばなし』（毎日放送）でアニメーション制作を開始し、アニメーション・コンピュータ・グラフィックスによる映画・ビデオ・テレビ番組・CMなどの企画・制作、音響制作で、多くの賞を受賞し評価を受けた〉

牧村　少し、むかし話をすると・・・ぼくが六文銭（別役実作品には楽団六文銭として参加、小室等と六文銭など様々な名義がある。1969年、別役実のミュージカルでの生演奏のために結成されたグループ。芝居が終わると同時に解散することが前提だった）のマネージャーをやっていたころ、彼らが虫プロ制作の映画に起用されて、その音楽を担当していた冨田勲さんに〈挿入歌を作って欲しい！〉と言われたことがあった。その音響係がグループ・タックの田代さんだったというわけ。つまり手塚治虫さんがいて、冨田勲さんがいて、田代さんがいるような時代。

鈴木　手塚さんと冨田さんの『クレオパトラ』（1970年。虫プロと日本ヘラルド映画が提携した大人向け「アニメラマ」）もすごく良かった。『哀しみのベラドンナ』（1973年）もすごかった。

牧村　そうだね。当時はフォーク・ミュージックと、シンセサイザーを使った現代音楽の先駆者の冨田さんが（普通に）一緒に仕事をしていたんだよ。

鈴木　武満徹さん、とかも。

牧村　こういった才人たちが、1970年代には横並びに〈うわーっ〉といた。その人たちが1980年代

にもボコッボコッと出てくる。その田代さんが、虫プロから飛び出て作った会社がグループ・タックで、そこに呼んだのは手塚さんではなくて、杉井ギサブローさんだった、という・・・そこで、杉井さんと田代さんは、映像と音のコンビになったんだね。その輪が、ぐるりと回って『銀河鉄道の夜』が細野さんのところに巡ってくる。これは全然、ぼくの中では不思議ではないね。日本の音楽、日本アニメーション映画の重要人物たちが、ちゃんと出会うところで出会ってる。だから『銀河鉄道の夜』は日本アニメ史の中で、ある種、必然であったと言えると思う。

鈴木　それで、『銀河鉄道の夜』は『ノンスタンダード』レーベルのカタログに入っているのですが・・・当時はテイチク傘下のレーベルは、ポップス系の『ノンスタンダード』と、アンビエント系の『モナド』に分かれていました。『モナド』は、細野さんの流れとしてはアルファ『YEN・ミディアム』を汲むものとも言えますが・・・1980年代中判、時代的にもテクノは終焉を迎え『モナド』のような音楽にも、積極的な意味合いがあったような気がしますが。

牧村　『銀河鉄道の夜』のテーマには、前年の「風の中のナウシカ」(1984年)と双璧のメロディがあると思います。映画のサウンドトラックでは、そのメロディがライト・モチーフとして繰り返されていく。それは非常にブライアン・イーノの『オブスキュア』レーベルのようなアンビエントのメロディであり、構造であるにも関わらず、松本隆くんが詞を入れるとポップスの構造になる・・・。だから『銀河鉄道の夜』は『モナド』と『ノンスタンダード』をつなぐものと言える。レーベルが続いた、たった2年の中のみんなの総集編は『銀河鉄道の夜』の中にあるんです。

鈴木　ぼくのワールドスタンダードも、当初は『モナド』から出る予定でした。1985年、ぼく自身もポップスとアンビエントの狭間で揺れていました。だからこそ、その中間のような音の『銀河鉄道の夜』に心を打たれたのだと思います。それで、今回の再発で調べていて、改めてキモ(重要)だなと思ったのが、脚本を手掛けた別役実さんの存在なんです。

牧村　はい。

鈴木　昨夜も聴いていたのですが、あの有名な「雨が空から降れば」(1966年・作詞:別役実　作曲:小室等)も歌詞を読み直してみると、とても宮沢賢治的だなと思いました。〈雨が空から降れば　想い出は　地面にしみこむ〉〈雨が　シトシト降れば　想い出は　シトシトにじむ〉〈黒いコーモリ傘をさして街を歩けば〉〈あの街は　雨の中　この街も　雨の中　電信柱も　ポストもフルサトも　雨の中〉・・・ただのフォーク・ミュージックには聴こえない。

牧村　そうかもしれない・・・

鈴木　ぼくは、この歌を吉田拓郎さんのヴァージョンで知りました。折しも1970年代、シンガー・ソング・ライターの時代です。ヒッピー・ムーブメントからのネイチャー志向も、色濃く残っていました。だから、この歌詞の中の〈あの街〉〈この街〉は、自由に放浪しているムードなのだと思っていました。でも、別役さんだからこそ、きっと〈あの世〉〈この世〉のことを指していたのだと思います。「雨が空から降れば」のタイトルの意も、賢治さん寄りで見れば「慈愛の雨

が天上から降る」というイメージ・・・とても偏った見方ですが。別役さんは、舞台にも必ずと言っていいほど、一本の電信柱を立てていました。「雨が空から降れば」の歌詞にも出てきますが、別役さんにとっての〈電信柱〉は、やはり賢治さんへの強いオマージュだった、と思います。

牧村　別役さんが、どうして〈あの街〉〈この街〉って使うのかはわからないけれども、「あの街この街」は、やはり死の世界と生の世界の行き来（パラレル・ワールド）だと思うわけ。別役さんのSF的、当時で言えばアヴァンギャルドな脚本は、いつも生と死を超越してるような世界だった。それは『銀河鉄道の夜』の音楽を制作している中で、細野さんが無意識か意識の中にあったのかわからないけれど、このレコードで、別役さんと細野さんが（宮沢賢治を通して）共鳴していたのは、確かだと思う。

コシミハル
インタビュー：2017年8月18日

コシミハル／音楽家

父親がファゴット奏者、母親が声楽家というクラシック一家に育つ。3歳からピアノ、8歳から作曲を始める。1983年、純音楽家・遠藤賢司のレコーディングにキーボード&コーラスで参加したことがきっかけで、自作のデモ・テープが細野晴臣の耳にとまり、アルファ『YEN』レーベルと契約。第一作『チュチュ』（1983年）を発表。続く『パラレリズム』（1984年）では、後ヨーロッパ・ツアーも行う。1985年、細野が立ち上げた『ノンスタンダード』レーベルに移籍し、アルバム『ボーイ・ソプラノ』を発表。単に、テクノ・ポップという枠では括りきれない、シンガーとしての魅力を打ち出した。以降、様々な編曲、映画音楽、舞台音楽などを手掛け、1989年「今宵マドンナ」で広告音楽競技大会作曲賞受賞。1997年からは、音楽とバレエ・ダンスをひとつに昇華したステージ演出も手掛ける。シャンソン、ジャズのスタンダード、クラシックなど、あらゆる音楽を融合した唯一無二の音楽性は、多くの音楽家や芸術家たちを魅了し続けている。

鈴木惣一朗（以下・鈴木）　『銀河鉄道の夜』の音楽が持つ、時代的な背景〜空気感のようなものを知ることで、より作品に近づけると思いますので、細野さんの音楽に最も近いミハルちゃんに『銀河鉄道の夜』発表の前後『YEN』レーベルから『ノンスタンダード』の『ボーイ・ソプラノ』（1985年）への流れからお聞きしたいと思います。

コシミハル（以下・ミハル）　はい。

鈴木　ぼくの見方ですが、ミハルちゃんは『YEN』レーベル時代からの飛躍というか『ノンスタンダード』レーベルでは、確実に作家性が増していったと思うんです。

ミハル　YENレーベルに入る前のお話をすると・・・ティアック144という4トラックのレコーダーを手にし、それまでのピアノで曲を作るというスタイルから解放されて、自由に音を重ねていく遊びの中で、次々と曲が出来上がりました。でも、ひとりで部屋で作っていたので、とても孤独で、どうして良いのかわからないまま、ひたすら作り続けていました。

鈴木　1980年代当時、テクノの手法は、社会性のある音楽で〈とりあえずテクノだったら、その音楽を

聴いてみようかな〉という軽やかな風潮もあったと思うんですが･･･

ミハル　テクノが流行っているとか特に意識をしていたわけではなくて、シンセサイザーなどの機材が楽しくて、知らないうちにテクノになってしまったのです。細野さんに「とても面白いよ!これはテクノだよ!」って言われて、ぼんやりしちゃったぐらいですから。(笑)

鈴木　意外です、そうだったんですか。

ミハル　その頃に遠藤賢司さんのアルバム『オムライス』(1983年 プロデュース細野晴臣)のレコーディングに声をかけていただいて、初めて細野さんに会いました。

鈴木　『オムライス』は、とにかく衝撃的なアルバムでした。テクノなんだけど、朗読(平山みき)も入っていて文学的というか、すごく不思議なアルバムだと思います。それでぼくは、発売記念のライヴ(渋谷のライヴ･ハウス〜エッグマン)を観に行くんですが、当時『オムライス』は〈エンケン･アンビエント･テクノ〉なんて呼ばれてましたよ。



オムライス/エンケン「遠藤賢司」

提供:日本コロムビア

ミハル　細野さんが、その時作っていたもの(多重録音のテープ)を、そのまま『YEN』レーベルでアルバムにしましょうと言ってくれたので、『チュチュ』(1983年)『パラレリズム』(1984年)へと繋がりました。その後は、オリジナルと並行して古い音楽を集めたカバーアルバムを作るようになりました。そのスタイルは後の『エコー･ド･ミハル』(1993年)『フルフル』(2001年)などを経て、今に続いています。古いレコードの中にあるノスタルジックな響きがとても好きで、トミー･ドーシー楽団などビッグバンドサウンドをシンセサイザーでシミュレートしたアルバムを作ったり、ここ数年はトリオの生演奏を中心にレコーディングをしたり。

鈴木　『コルセット』(2003年)、『覗き窓』(2008年)辺りから、今のミハルちゃんの感じに落ち着いたというか、ある境地に達した気がしています。

ミハル　「ミュージックホール」というシアトリカルな舞台をダンサーたちと一緒に作り始めた頃から、振り付けのことを思い描きながら曲を作るようになりました。細野さんから〈もうデモ･テープは作らないで、そのままレコーディングしたら?〉と言われて、オリジナル曲は家で録音するようにスタジオでトラックを作ったのが『ボーイ･ソプラノ』です。そして何と言ってもエンジニアの巨匠田中信一さんとの出会い、『銀河鉄道の夜』もそうだけれど、田中さんのミキシングが素晴らしいです。

鈴木　先ほど、作家性という言い方をしましたが、1980年代も半ばになると、ある種〈新しい〉ということが絶対ではなくなっていて･･･〈とにかく良ければいい〉というニュートラルな時代に突入した感じだったと思います。ぼく自身もそれまでのテクノ、ニュー･ウェイヴ一辺倒から、ライト･クラシックや古いジャズ、イタリアの映画音楽なんかを聴き始めていて。でも、何か目的があってというより、とにかく聴きた

かっただけなんです。無性に子供の頃に聴いていたものが懐かしくなったというか・・・そんな時期だったので『銀河鉄道の夜』のサントラ盤とミハルちゃんの『ボーイ・ソプラノ』が、すごくしっくりきたんです。

ミハル　ある日、シューベルトの「野ばら」のメロディが突然天から降ってきて（笑）いてもたってもいられなくなって、録音を始めました。それを聴いた細野さんが〈面白いからそのままレコーディングすればいいんじゃないの？〉と。後になって思い返してみると、子供の頃、母の歌に合わせて、私がピアノの伴奏するっていうのが、毎日の遊びだったんです。その中で、母が好んで歌っていたのがシューベルトの歌曲でした。そして、当時テレビで放映されたウィーン少年合唱団を描いた映画「野ばら」がとても好きだったことも思い出し、長い間忘れていた記憶が蘇ったんですね。

鈴木　（笑）。『ボーイ・ソプラノ』の録音、シューベルトの楽曲そのものはすぐ弾けたんですね。

ミハル　覚えてました。シューベルトのピアノ伴奏の和声を基軸に、マーチング風のドラム、ミニマルな繰り返しのフレーズが思い浮かび、それに誘われるように、森の奥で鳴り響くオルガンと、暗闇の中に晴れ渡る青空、その中を走り抜けていく少年のイメージが浮かんで、あっという間に出来上がってしまいました。「野ばら」はオランダのレコード会社でシングルカットされて、ドイツのテレビで演奏したりしました。

鈴木　クラシック音楽は、ずっと好きだったということでしょうか。

ミハル　子供の頃はあまり・・（笑）でも今はとても好きです。大人になってから好きになりましたね（笑）フランシス・プーランクやジョルジュ・オーリックなどのフランス近代音楽を取り上げたアルバムやポール・ヒンデミット、アルバン・ベルク、エリック・サティなどを取り上げたCDbookを作ったり。でも、小さな頃は父がいつもリビング・ルームで大音量で音楽を聴いていたので、ロマン派やバロック音楽などを浴びるように聴かされて、辛かった（笑）。それで、父が部屋から出て行くと、ラジオでポピュラー音楽の時間になって、シャルル・トレネやイヴ・モンタンなどの古いシャンソンが流れてきて、ウキウキした気分に。これは一体何なのだろう？と。

鈴木　普通にラジオでよくかかってましたよね、いわゆる軽音楽の世界。

ミハル　ルロイ・アンダーソンやディアナ・ダーヴィンの歌など・・・何とも言えない幸せな音楽・・・子供の頃はシングル盤や譜面を街のレコード屋さんで買って、ピアノで弾いて歌うのが楽しみでした。

鈴木　そうした（ロック以外）世界のいろいろなジャンルの音楽が、身体にどんどん入って来る時期ってありますよね。『銀河鉄道の夜』の音楽を聴いていると、ぼくは思い出すんです・・・『ノンスタンダード』のオフィスに初めて行った時、細野さんがクラシック音楽のレコードを聴かせてくれたことを・・・フランク、プロコフィエフ、ケテルビー、チャイコフスキー、スメタナ、そしてドヴォルザーク。他にも「日曜日はダメよ」の映画音楽を手掛けたマノス・ハジダキス、ネオリアリズムのイタリアの映画音楽〜フェデリコ・フェリーニ、ヴィットリオ・デ・シーカ、ピエト



『ボーイ・ソプラノ』

ロ・ジェルミの話もしました。ぼくはその頃、乾いたニュー・ウェイヴの音楽に疲れ、湿度や温度のある音楽に飢えていたんだと思います。当時の言い方として、細野さんは「一人称の音楽～ある楽器を使って〈自分と対話する音楽〉の重要性」のことも話してくれました。その時も、ぼくはミハルちゃんの音楽のことを思い出していました・・・『ボーイ・ソプラノ』の時、使っていた機材って覚えてますか？

ミハル　ローランドのヴォコーダーとJuno-60、YAMAHA CS15、DX7、プロフェット5、イミュレーターなど。

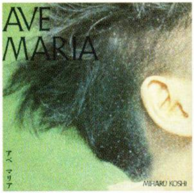
鈴木　そうした機材からもわかるのですが、その時期は、それほど革新的な電子楽器も出てこなかった。ある意味、スタンダードなものを使っていた時代です。なので多くの音楽家の作家性が増していったとぼくは思うんです。『銀河鉄道の夜』では、やはりミハルちゃんが携わった4つのトラック～「よろこび」「ジョバンニの透明な哀しみ」「走る」「鎮魂歌」が光ります。素晴らしい。これらの楽曲は、細野さんからの発注はどんな感じだったんですか？

ミハル　好きなように作って良いので作ってね（笑）この4つのトラックに関しては、細野さんがいなかったので、ひとりでスタジオに入って作りました。場所は、テイチクの杉並グリーンバード・スタジオだったと思います。

鈴木　4つのトラック以外は？

ミハル　色々な曲の中でシンセを演奏しました。ハーモニーやメロディを加えて行くという作業です。

鈴木　ミハルちゃんの言を補足すると（笑）・・・細野さんは現場で、あまりディレクションしないですよね。ちょっとだけ〈こんな感じでお願い〉と言うだけ。神通力というか、ムードで自分の世界に引き込んでいくタイプです。中でも、ミハルちゃんには（信頼関係から）特に、言わない感がありますね。改めて『銀河鉄道の夜』というアルバムが持つ、独特な、フェミニンなムードは・・・ミハルちゃんの4つのトラックに引っ張られたのでは？と考えます。細野さんはアメリカン・ミュージックをやるときにはマッチョになりますが、それ以外のヨーロッパの音楽になると、幸宏さんとのコラボレーション（スケッチ・ショウ）でもそうでしたが、女性的なハーモニーになる。宮沢賢治さんが持つ〈永遠の少年性〉とは、女性的な感覚を持ち得ることです。『銀河鉄道の夜』は、ミハルちゃんの4つのトラックによって、細野さんの中にある〈女性性〉が引き出された。だからその音楽は、より〈宮沢賢治の世界〉に近づけたんだ、とぼくは思うんです。



コシミハル／アベ・マリア
（オランダ盤シングル）

対談：細野晴臣×鈴木惣一朗
2018年6月4日
（『デイジー・ホリデー』（Inter FM）対談時の様子を再録、編集）

鈴木　まず最初に『銀河鉄道の夜』の音楽は・・・



カセット・テープ・インデックス

1984年12月22日のクリスマスの頃、細野さんは、古巣の芝浦アルファ・Aスタジオに入って、そのスケッチを作っています。間が空いて、翌年（1985年）の春。音響ハウスで、ぼくはワールドスタンダードのミックス・ダウンをやっていたんですが・・・

細野　覚えているよ、築地にある、音響ハウスね。

鈴木　細野さんが、毎日、スタジオに裸足に短パンでやって来る。

細野　裸足じゃないでしょ（笑）

鈴木　いやいや、裸足でした。当時は、スタジオに来たら（靴を脱いで）裸足になってた。

細野　あー、当時そうだったかもね（笑）

鈴木　その頃の細野さんは働き盛りで、『銀河鉄道の夜』を仕上げる真っ最中、しかも同時に、いっぱいアルバム（『コインシデンタル・ミュージック』『マーキュリック・ダンス』『エンドレス・トーキング』等）を作っていました。

細野　そうね、よく働いてたよな、あの頃。

鈴木　その時『銀河鉄道の夜』の音楽を、ぼくに聴かせてくれました。

細野　あ、ホント？

鈴木　よく覚えています。細野さんは、すごい機嫌が良かったから。声も大きくて「聴いてよー！」みたいな感じ。

細野　（笑）ホント！？

鈴木　それで、ぼくは…ブッ飛んじゃったっていうか、『銀河鉄道の夜』で落ち込んじゃった。

細野　落ち込んだ？

鈴木　そのとき、自分が作ってる慎ましやかな音楽に比べると、ものすごいダイナミクスで。

細野　そうだっけね…んー。

鈴木　とにかく、びっくりしちゃって。ぼくは状況を、よく知らなくて。細野さんこれって？『銀河鉄道の夜』って何なんですか！と。

細野　うんうん。

鈴木　で、そのときです！「映画のために、いっぱいトラックを作ったんで、アルバムは2枚組になっちゃうと思うよ、鈴木くん」って言われたのをすごい覚えてます。

細野　ああ、そうだったっけ。

鈴木　30年経っても、ぼくは覚えていました。

細野　おー。執念深いっていうかね。

鈴木　それで、各方面でテープを捜索したところ、未発表音源がいっぱい出てきた、という経緯がありまして、目出度く『銀河鉄道の夜・特別版』となりました…前置きが長くなりました。

細野　いいよ。

鈴木　そもそも、細野さんが『銀河鉄道の夜』の物語を読んだのは、いつだったんですか？

細野　『銀河鉄道の夜』はね、はっぴいえんどの頃。

鈴木　あれっ、意外です。そうなんですか？

細野　うん。その前のは…『風の又三郎』とかね、映画（1940年『風の又三郎』 監督・島耕二、1957年『風の又三郎』 監督・村山新治）にもなってるし、いろんな形で知ってはいた。

鈴木　それは小さい頃？

細野　そうそう。子どもとして、子ども向けの物語として捉えてた、だけね。

鈴木　たとえば他の、稲垣足穂とか、中原中也であるとかも、はっぴいえんど活動中に知ったんですか？

細野　それ以降だね。ああいうのは、大人になんないとわかんないから。

鈴木　はっぴいえんどの頃、『銀河鉄道の夜』を教えてくれたのは、やっぱり松本隆さん？それとも大瀧さん？

細野　まあ、教えられたというか、とにかく有名な本だから。松本隆が、そういうのをすごく読んでたのは知ってるけど。ま、自分もこの際だから、ということでね、読んでみた。うん。

鈴木　その時の印象は？本当に、不思議なお話なんで。

細野　んー、そうだね…長かったな（笑）

鈴木　（笑）長かった…ね。でも、細野さんは見事に読み切った！

細野　多分ね…多分。よく覚えてないんだよね（笑）

鈴木　いいんです。今（2018年）覚えていることだけを言ってくれれば、いいです。

細野　はい。

鈴木　それで、『銀河鉄道の夜』には…タイタニック号沈没事故のことがインサートされていますが。

細野　そうなんだよね。

鈴木　タイタニック号に乗船していた、細野正文さん（細野さんの祖父）のこと…細野さん自身と『銀河鉄道の夜』の因果関係について、わかっていましたか？

細野　『因果鉄道の夜』だ（笑）

鈴木　（笑）『因果鉄道』じゃないです『銀河鉄道』です。

細野　いやあ…何となくね、同じ時代だったのか、ということだよね。

鈴木　あ、ちょっとボワンとしてるけど、知ってはいたんですね。

細野　うん。当時は、詳しく掘り下げたりはしなかったけど・・・（細野さんは幼少期、父・細野日出臣さんに連れられ、映画『SOSタイタニック／忘れえぬ夜』（1958年）を観ている。その帰り路にタイタニック号におじいさんが乗っていたと告げられた）

鈴木　実際に、沈没するときには〈人々を癒す意味〉で、賛美歌「主よ、みもとに近づかん」が演奏されたという。

細野　有名な話としてね。

鈴木　もう、今となっては童話のようなお話ですが、細野さんは…後年になって知ったのですか？

細野　ずいぶん、後だよね。ギャヴィン・ブライアー

ズの『タイタニック号の沈没』というアルバム(1975年〜作曲は1969年)があって好きでよく聴いてた。で、そのアルバムでは、楽団が演奏していたのは、実はこっちなんじゃないかっていう別曲を取り上げてた。

鈴木　そうですね。

細野　「それが、賛美歌の何番かはちょっと覚えてないけど(笑)

鈴木　いろいろ候補があって。「主よ、みもとに近づかん」ではないんじゃないか、ということですよね。賛美歌「オータム」(※)じゃないかと。

細野　通説でね。

※ 賛美歌「オータム」：音楽家・ギャヴィン・ブライアーズは、実際の「タイタニック号沈没事故」で、最後まで演奏を続けていた楽団員たちの演奏内容を、生き残った乗客や船員たちの証言を元に再現しようと試みる。宮沢賢治の小説を元にした映画『銀河鉄道の夜』では〈人々を安らかな死へと送り出す賛美歌〉として「オータム」を「主よ、みもとに近づかん」として描かれたが、ブライアーズは、諸説ある証言の中から、船とともに氷の海へ沈んで行った楽団員たちが、実際に死ぬ間際まで演奏した曲を「オータム」と選定。1975年のレコーディングの際には、実際の楽団と同じ弦楽六重奏(ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロそれぞれ2本ずつの編成で演奏)で、25分間「オータム」を繰り返し演奏し録音した。

鈴木　話は戻りますが・・・『銀河鉄道の夜』のオファーが来たとき、正直、細野さんはどう思ったんですか？

細野　これはやりがいがあるな、って思ったね。

鈴木　やりがい、ですか。

細野　というのはやっぱり、真っ先に「タイタニック号沈没事故」の因縁というのかね、因果というか・・・これは〈宮沢賢治ときちんと向き合わないとできないな〉と思ったの。要するにミディアムっていうか「霊媒」って言っちゃうと、ちょっとニュアンスが違うけど。宮沢賢治の気持ちを理解しないといけない、という気持ち。平たく言えば、どんな気持ちで過ごした人か、っていうことに自分を合わせようとしたわけ。なんかこう…それまでは遠い人だった、岩手だし。でも、仲間のひとり(大瀧詠一)はイーハトーブだった・・・

鈴木　ちょっと脱線しますけど。『銀河鉄道の夜』から約8年後、ぼくは『宮沢賢治 メンタル・サウンド・スケッチ 星めぐりの歌』(1993年)というトリビュート・アルバムのプロデュースを手掛けます。

細野　そうだっけね。

鈴木　細野さんにも参加してもらったんですが、覚えてますか？裕木奈江さんとタッグを組んでもらって、再度「星めぐりの歌」を編曲してもらいました。

細野　ははぁ、あれがそうか。あれ、いいアルバムだったね。

鈴木　いいアルバムでしょ？それ、ぼくが作ったんですよ(笑)

細野　あれ、そうなんだ(笑)

鈴木　真面目な物言いになりますが・・・『銀河鉄道の夜』の感動はあれからずっと、30年以上になりますが、ぼくを包んでいるんです。ホーリー(holy)な響きが包んでいるんです。



朝日新聞社 テレビ朝日 日本ヘラルド映画グループ制作

銀河鉄道の夜

主題歌シングル　オーディション優勝歌手　07NS-101　¥700　6/21 発売予定
サウンドトラック盤　音楽：細野晴臣　LP：25NS-5　CASSETTE：N25S-5　¥2,500　7/7　発売予定

Non STANDARD

細野　へぇ！ホントなんだ。

鈴木　『宮沢賢治 メンタル・サウンド・スケッチ 』を作る時にも感じたんですが、細野さんのホーリーな音の響きは『銀河鉄道の夜』前後から…芳しい香りがしてくるんです。ちょうど、YMOが終わる頃…段々と。

細野　なるほど。

鈴木　それが…何なんだろう…と思っていて。そこで、宮沢賢治が持っている世界観や宗教観と、YMOを終えた細野さんの心境が、微妙にクロスしていくんです。

細野　うん。

鈴木　例えば当時の仕事、松田聖子さんの「ガラスの林檎」(1983年)、安田成美さんの「風の谷のナウシカ」(1984年)を聴いても、ぼくはホーリーだと思ってました。

細野　ひぇー。

鈴木　例えば『銀河鉄道の夜』にも収録された「プリオシン海岸」という曲は、後年、福沢もろさん(ヴォイス・アーティスト)によって「プリオシーヌ」(『オムニ・サイトシーング』収録)として歌われますが…やはりホーリーな響きです。

細野　作り直し、歌にした。

鈴木　「プリオシン海岸」及び「プリオシーヌ」におけるホーリー感。更に『花に水』という細野さんの著書／カセットブック(1984年)でも・・・

細野　無印良品の、店内用BGMだったんだよね。

鈴木　同じようなものを感じました。

細野　うん。

鈴木　いわゆる、今日的には「スピ系」と言いますけど、スピリチュアルね。

細野　うんうん。

鈴木　この時期、細野さんの音楽の中での、ひとつの変化があったような…それが『ノンスタンダード』の隣にあった『モナド』にも結実していく。細野さんと宮沢賢治が触れ合っていくあたりに…何か、こう。

細野　まあ、きっかけにはなってるよ、確かに。やっぱり宮沢賢治の宗教観っていうのは、すごく大きい…仏教的な世界観だったり。でも、もはや仏教に留まらないというかさ、エスペラント語を使ったりしててね。世界に向けた精神世界があるわけでしょ。そこに、すごく共鳴したのは確かだよね。うん。

鈴木　世界に向けた精神世界…もはや、ぼくのキャパシティを超えています(笑)『銀河鉄道の夜』〈この音楽は一体なんだろう？〉という感覚、それは今も変わらないなぁ・・・

細野　なんで、あんなのが出て来たのかね。

鈴木　とにかく、何度も聴きたくなるんです。

細野　あのね、杉井ギサブローさんっていう『銀河鉄道の夜』の監督さんに、最初「揺れる音楽を」って言われたんだよ。だからね、冒頭のシーンにそれ(「幻想四次のテーマ」)を使ったわけ。音が揺れてんの。画面も揺れてるしね。

鈴木　細野さんも、いつも揺れてる。

細野　揺れてる、揺れてる。ブル、ブル、ブルっていうような。実はあれが一番好きなんだよ(笑)だから、「揺れる音楽」っていうキーワードを頼りに『銀河鉄道の夜』は作り始めて…当時はドヴォルザーク、ス

メタナとか、ボヘミア楽派の作曲家なんかも聴いてて、その影響は強いかもしれないな。

鈴木　当時、細野さんは頻繁にチャイコフスキーも聴いていました。『銀河鉄道の夜』の音楽には「アンダンテ・カンタービレ」の空気感ありますね。神聖で、厳かな。

細野　そう！「アンダンテ・カンタービレ」大好きなんだよ。セザール・フランクの「ヴァイオリン・ソナタ」も好きでずっと聴いてて、それをどっかで発表したら…「レーリッヒ協会」（ニコライ・レーリッヒ～1874年 - 1947年：ドイツ系ロシア人画家。美術界と法曹界で訓練を積んでおり、文学や哲学、考古学に関心を寄せた知識人でもあった）の人たちが訪ねて来たんだよ。

鈴木　え！

細野　神秘主義だね。レーリッヒは息子さんと共に、馬に乗ってシャンバラを訪ねていったんだよ・・・（シャンバラはチベットにおける伝説上の仏教王国。レーリッヒは、そのシャンバラに近づき、その景観を絵に収めたと言われている。因みに、細野さんはかつて「シャンバラ通信」（1978年『はらいそ』収録）という曲を作っている。でも、実際にはシャンバラに辿り着けはしなかったみたいだね・・・そういう憧れというか、ロマンがあったワケさ、フランクの時代には。

鈴木　細野さんは、不思議な音楽家・グルジェフ（ゲオルギィ・グルジェフ）という作曲家の音楽も聴いていました。

細野　作曲家というか、まあ、神秘主義者だよ。グルジェフ・ダンス（神聖舞踏。踊りのひとつひとつに深い意味が隠されている）っていうのがあってね、日本でも時々やってるみたい。見ていても、あまり面白いとは言えないんだけど。

鈴木　思い出した。細野さんはグルジェフのピアノ・ソナタについて、おもしろい言い方をしていて。「ロマンティックだ！」って言ってました。

細野　あ、そうだっけ？（笑）

鈴木　ぼくからすると、ちょっと怖い音楽を、細野さんは「ロマンティックだ」って言ってたんです。その感覚を、すごく面白いなぁ、と思っていました。

細野　そうか。当時は、そう思って聴いてたんだな。

鈴木　でも、その後にね。デヴィッド・リンチの世界・・・

細野　いいねぇ。リンチ。

鈴木　怖いでしょ？　怖い、怖いっていうわけ、みんな。

細野　何が？リンチが？

鈴木　この年齢になって観ると、デヴィッド・リンチの映像は、全然、怖くないですよ。むしろ、ロマンティックです。話が流転してますが、宮沢賢治→ゲオルギィ・グルジェフ→デヴィッド・リンチ、みなさん怖くてロマンティック。『銀河鉄道の夜』の辿る先は・・・シャンバラへの道なんでしょうか？という大命題を残しつつ、この辺で。ありがとうございました。


Muziko Komponita de HOSONO Haruomi
ÑOKTO
DE
LA GALAKSIA FERVOJO
de
MIYAZAWA Kenzi
銀河鉄道の夜
細野晴臣
長編アニメーション
銀河鉄道の夜
オリジナル・サウンド・トラック盤
Giovanni (ジョバンニ)
Campanella (カムパネルラ)
¥2500
25NS-5
STANDARD
発売元 テイチク株式会社


Side A
1. メイン・タイトル
2. 幻想四次のテーマ
3. 幻想と現実
4. 晴れの日
5. 星めぐりの歌 (1'37") ✢
6. ジョバンニの幻想
7. ケンタウルスの星祭り
8. 天気輪の柱 (6'30")
9. よろこび (3'08") ※
10. 北十字 (2'01")
11. プリオシン海岸 (3'09")
Side B
1. 幻想の歴史
2. 極楽のハープ
3. ジョバンニの透明な哀しみ ※
4. 一番のさいわい
5. 別離のテーマ (3'05")
6. 走る ※
7. 45分
8. 鎮魂歌 ※
9. エンド・テーマ「銀河鉄道の夜」
※……Muziko de KOSI Miharu kaj HOSONO Haruomi
✢……Komponita de SIMIZU Osamu
Non STANDARD
1·7·7
STEREO ¥2,500
発売元 テイチク株式会社
長編アニメ映画「銀河鉄道の夜」オリジナル・サウンド・トラック版
銀河鉄道の夜 細野晴臣
DCS
N25S-5
¥2,500
NON STANDARD
N25S-5
Muziko Komponita de
HOSONO Haruomi
ÑOKTO
DE
LA GALAKSIA FERVOJO
de
MIYAZAWA Kenzi
"Nu do, karaj, ĉu vi scias, kio fakte estas tiu nebula blankaĵo,
kiun oni nomis jen rivero jen postesigno de fluinta lakto ?"
DCS
DOLBY SYSTEM
NOKTO DE LA GALAKSIA FERVOJO
Muziko de HOSONO Haruomi
DCS
N25S-5
¥2,500
NON STANDARD
長編アニメ映画「銀河鉄道の夜」
オリジナル・サウンド・トラック版
銀河鉄道の夜／細野晴臣
1. メイン・タイトル
2. 幻想四次のテーマ
3. 幻想と現実
4. 晴れの日
5. 星めぐりの歌
6. ジョバンニの幻想
7. ケンタウルスの星祭り
8. 天気輪の柱
9. よろこび
10. 北十字
11. プリオシン海岸
A
STEREO
N25S-5
DCS
580087
12型
TEICHIKU MUSIC CASSETTE
ALL RIGHTS OF THE MANUFACTURER AND OF THE OWNER OF THE RECORDED WORK RESERVED. UNAUTHORISED COPYING PUBLIC PERFORMANCE AND BROADCASTING OF THIS TAPE PROHIBITED. TEICHIKU RECORDS CO., LTD. JAPAN
Non STANDARD

補足

(前述『銀河鉄道の夜』で脱稿しましたが、下記、細野さん発言部分〜作曲家/細野晴臣の起源として興味深い発言も多く、記録として残しておきたいと思います)

鈴木　昨日、聴き直していて、ちょっと思ったんですけど…いいですか?

細野　うん。

鈴木　細野さんってピアノは、小さい時に…ピアノ導入教材としてバイエルであるとか、そういう教育って通られてるんですか?

細野　強制的に…母親がピアノ好きだったんで、やらされてたんだよ。

鈴木　そうですか、ヨハン・ブルクミュラーの『25の練習曲』とかは?

細野　ブルクミュラーね、うん。名曲が揃ってるよね

鈴木　名曲、そうなんですよ。ぼくも(練習曲としてではなく)楽曲として、ブルクミュラーを昨日聴いてたんですけど、やっぱり細野さんの…ルーツかな、と。

細野　あー…バレたか(笑)

鈴木　『25の練習曲』はスクエアーな練習曲ですが、やはり『銀河鉄道の夜』の響きがするんです。

細野　なるほどね。意識したことはなかったけど、今、言われて影響はあるかもしれないな、と思うよ。もうひとつね、教則本にフランスのがあるんだよ。メトード・ローズ!知ってる?

鈴木　?知らないです。

細野　これはねー、元がフランス民謡だったり、なかなか個性的な教則本で。大好きだったんだブルクミュラーというのは、メトード・ローズよりもう一段階上の教則本だね。

鈴木　じゃあ、バイエルとブルクミュラーの真ん中ぐらいが、そのメトード・ローズというわけですか?

細野　バイエルはね、実はやってないんだよ。

鈴木　あ、やってないんですか?

細野　メトード・ローズから始めたの。

鈴木　細野さん、やっぱり原点が違いますね。スタートはフランスから。

細野　バイエルが全然おもしろくなくて・・・

鈴木　運指の練習は、苦しいだけっていうか・・・

細野　まあ、教則本っていうのはそういうものですよ。でも(音楽だから)影響っていうのはあるよね。子供のころに刷り込まれて。

鈴木　先日、ぼくは『銀河鉄道の夜』がホーリーだの、何だのって言ってましたけど。

細野　はい。

鈴木　細野さんは『銀河鉄道の夜』の音楽を作るときに…子供時代〜メトード・ローズの時代に〈戻った〉感があるんですよ。

細野　そうですか。

鈴木　『銀河鉄道の夜』は、宮沢賢治が子供のために作ったお話でもあるから、細野さんは、無意識のうちに(郷愁としても)呼応したのかなと。

細野　んー・・・あんまりそういうことは考えないでやってたけどね。だから、思うまんま。当時はね、鍵盤に向かって即興的に作ってたんだよ。「プリオシン海岸」なんてワン・テイクだったんだよ。

鈴木　そうだったんですか。

細野　もう、ほとんど同時にミックスしちゃったみたいなところがある。でも『銀河鉄道の夜』の、あのテーマ曲は…どうやってできたんだろうね？（笑）

鈴木　聞かれてもー（笑）困ります。

細野　覚えてないんだけど･･･

鈴木　あれを称して、ぼくは〈リリカル〉と呼びます。

細野　そうなんですか（細野さん何故か敬語）？

鈴木　〈リリカル〉とは『銀河鉄道の夜』のテーマのことと、ここで言い切っちゃいます。

細野　あ、そうなんですか（細野さん再度、敬語）？どこから出て来たんだかね、わからない。ぼくもね、あれは。

鈴木　何の影響なんだろう･･･う〜ん。不思議です。

細野　ぼくもわかんないけど、小学校のときに･･･さっき言ったピアノの教則本もあるけど、きっと、映画の影響もあるんだろうね。

鈴木　あっ、そうそうそう。そのことを聞きたかった。

細野　イメージなんだよ･･･例えば、不思議なアニメーションがある。チェコの『悪魔の発明』！（1958年　監督・カレル・ゼマンによって映画化された。原作はジュール・ヴェルヌが1896年に発表したSF小説）。これは、今も観たい作品のひとつなんだけどね。その世界観が、とにかく好きだった。アニメーションというと、ぼくの中の原点は、ディズニーのアニメ。あるいはワーナーの『トムとジェリー』とかね、そういうのもあったけど、チェコとかロシアのアニメーションは、ゆったりとしてる。自分に一番近いのは『悪魔の発明』だったりするんだ、うん。

鈴木　ふむ、チェコなんですね･･･細野さんというと、一般的には、アメリカ文化に詳しい人という風な、ざっくりした印象がありますが。

細野　だろうな、アメリカ音楽研究会。

鈴木　アメリカ音楽伝承家。

細野　はい。

鈴木　ところがですね、『銀河鉄道の夜』･･･（細野さんのキャリアの中の）とか、特定の時期において、細野さんの音楽に、東欧的な音楽が宿る。

細野　この『銀河鉄道の夜』の中には、全然、アメリカ音楽の影響は無いね。

鈴木　まあ、ジョージ・ガーシュインのジャズ・クラシックとか、ちょっと聴こえますが…基本的には、ヨーロッパの辺境的なクラシック音楽の感じ。

細野　確かにそう。

鈴木　近作では…『万引き家族』（2018年　監督・是枝裕和）の音楽もそうです。

細野　うん。

鈴木　『万引き家族』には、ブラジルっぽい曲もありますが、東欧系の、ヨーロッパ趣味みたいな感覚があります。

細野　出てくるね。

鈴木　そんな音楽家いないですよ、なかなか（笑）･･･アメリカ音楽好きなら、ずっと、アメリカ音楽やっててくださいよ。

細野　（笑）

鈴木　細野さんの中では、音楽は･･･階層化してる気がします。

細野　あのね、やっぱりね、ぼく〈音楽的統合失調


長編アニメ映画「銀河鉄道の夜」イメージ・ソング
STEREO 700YEN 07NS-101
銀河鉄道の夜
中原香織
「銀河鉄道の夜」オリジナル・サウンド・トラックより
SIDE B 別離(わかれ)のテーマ
音楽：細野晴臣
1·6·21





銀河鉄道の夜

君がもし　知らない国へ
行くのならぼくは止めない
りんどうの咲く丘の上
ぼくたちは黙りこんだね

踏み切りの向こうに立って
手を振った君のほほえみ
草むらの錆びた線路は
マゼランの雲まで続く

幻想4次の銀河鉄道
オレンジいろの窓が横切る
十字星ゆき銀河鉄道
車輪の音はセロの響きさ

双眼鏡　指で作って
青白い星を見てたね
誰だって緑の切符
ポケットにかくしているのさ

水晶のリンゴみたいに
透き通る瞳をしてた
君のこと　ぼくは死ぬまで
忘れない　誓ってもいい

幻想4次の銀河鉄道
空を斜めにかけのぼってく
君が飛び乗る銀河鉄道
アルビレオまでひとっとびだね

幻想4次の銀河鉄道
赤いシグナルまたたいてたよ
君をさらった銀河鉄道
今日は淋しい星祭りだね

症〉なんですよ。

鈴木　何ですか〈音楽的統合失調症〉って？本当にあるんですか？

細野　いや、ぼくの中にはあるんだと思うよ。子どもの頃・・・戦後生まれだから、それこそ本当にGHQ（第二次世界大戦終結に伴う「ポツダム宣言」を執行するため、日本で占領政策を実施した連合国軍機関）の「洗脳」を受けてるんだよね。ブギウギなんかそうだよ・・・でも、それらが素晴らしいからいいわけだよ、つまんないものに洗脳されたわけじゃないんだから。いいものにすごく影響されて、それはもう自分からは拭い去れないっていうか、自分の核に入っちゃってるからね。それで・・・アメリカ的なものが自分の〈フィジカル部分〉だとすれば、ヨーロッパ的なものっていうのは自分の中の〈メンタル部分〉に、すごく入りこんできているもの。

鈴木　よくわかります。

細野　そこら辺が、自分の中で（音楽的に）やっぱり、統一できてないっていうかね。でも全部、平等に影響されているものなんで、そのまんま自分の音楽として出しちゃってる。時と場合によって、なんて、使い分けていない。仕事の中で、それが活かされれば、それを使うとか、そんなところだね。

鈴木　ぼくは1959年の生まれですが、1960年代、繁華街とかラジオでは普通に・・・ヨーロッパ音楽がかかってました、ニーノ・ロータとかシャンソン、カンツォーネとか。

細野　そう、割と世界的にヒット・チャートに上がったりしてた時代があったんだよね。

鈴木　テレビでも普通に流れてて・・・つまり、イギリスやアメリカのロックに触れる前に、ぼくの世代でもヨーロッパの音楽に、幼少期、触れてしまっている。

細野　そうなんだよ。

鈴木　自分の意識とは関係なく〈聴かされていたものの影響〉って大きいです。GHQの刷り込みではないわけですが。

細野　だから日本も、アメリカ文化だけじゃなかった時代っていうのがあったんだよね。アメリカだけじゃない音楽を、みんな、いっぱい聴いてたね。確かにそうだ！

雑誌広告



NOKTO DE LA GALAKSIA FERVOJO

SPECIALA ELDONO

Muziko de HOSONO Haruomi

Supervisor, Commentary & Re-Mastering Producer: Sohichiro Suzuki (a.k.a. WORLD STANDARD)

Design & Audio Research: Takashi Okada (Li'l Daisy)

A&R: Junichi Yuda (TEICHIKU ENTERTAINMENT)

Re-Mastering Engineer: Akihiro Shiba (TEMAS)

Re-Mastering Studio: TEMAS

Thanks to

Hiroshi Masumura

Heikichi Harata

Satomi Tanimoto (Medium, inc.)

Taro Takahashi (Speedstar Records)

Ippei Kaibara (Speedstar Records)

Osamu Sakaguchi (O.S.T.INC.)

Medium, inc.

＊音源の一部にノイズや歪みがありますが、マスターテープに起因するものです。あらかじめご了承ください。


NOKTO DE LA GALAKSIA FERVOJO
Muziko de HOSONO Haruomi

NOKTO DE LA GALAKSIA FERVOJO

Muziko de HOSONO Haruomi

flanko : 1-nua

1 :	La Ĉeftitolo
2 :	Temo el la Mondo de la Fantazia Kvara Dimensio
3 :	Fantazio kaj Realo
4 :	En Tago Serena
5 :	La Kanto de la Rondiro de la Steloj
6 :	Fantazio de Giovanni
7 :	La Stelfesto de Centaŭro
8 :	La Masto de "Tenkirin"
9 :	La Ĝojo
10:	La Norda Kruco
11:	La Pliocena Marbordo

flanko : 2-ua

1 :	La Historio en Fantazio
2 :	La Harpo de la Paradizo
3 :	La Travida Malĝojo de Giovanni
4 :	La Pleja Feliĉo
5 :	Temo de la Adiaŭo
6 :	Kuro
7 :	45 minutoj
8 :	Rekviemo
9 :	Temo Finala : Nokto de la Galaksia Fervojo

Non STANDARD TECI-1601